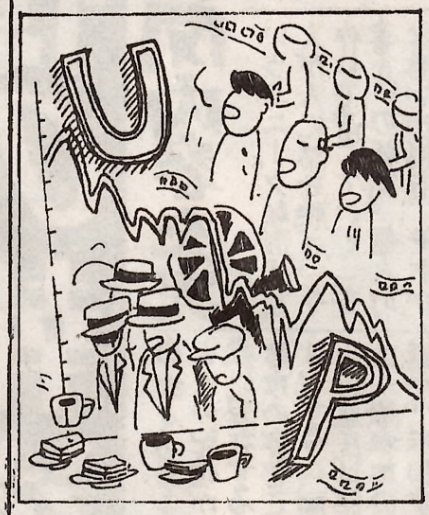
呉服生地で作務衣創作
控えめ店主の大胆挑戦
国際展開も視野に

飛田一市（かずいち）さん(69)は商店街で40年以上呉服屋を営んできた。昨今人通りが減って若い人も着物を着なくなった。このままだと家業も先細りになるが、先が細くなるのは針だけでいいと、この度作務衣（さむえ）を専門にした商売を思いついた。作務衣は下がズボンだ。奥さんから和裁を習い覚えた器用な飛田さんは、早速、ズボンを解体して自分で型紙を作り上げミシンも器用に操る。山形から二十歳の時に大阪へ来て以来、古着問屋で働いて着物地の知識を身につけた。同所で奥さんと知り合い、5年後結婚を機に独立して現在の「小福屋」を開いた。奉公先が「大福屋」なのでそれより控えめな名前にしたという。おふくやと読むが皆がこふくやと呼ぶのでそれも受け入れている。1点毎が2つと無いオリジナルになる。新たな挑戦に意欲を燃やす飛田さんである。

ウーピー！
大恐慌をのりきる屋号

飛田本通商店街内に新しい理容院がオープンした。オーナーの吉田友七さん（30）は大阪府南河内郡太子町の出身。大阪で宮大工の修行を積んだのち、神戸で洋家具職人になるなど、異色の経歴の持ち主だ。出店場所を決める際には、大阪中の市電停留所付近の通行者数を自身の足で調べあげたというのだから、気合いの入りようが違う。しかし出店までの経緯は順調とはいかず、警察の出店許可に3年かかるなど、さまざまな苦難に遭遇したという。開業にあたってつけた屋号は「ウーピー」。世界を震撼させている大恐慌の大元アメリカでの流行語で、人びとが景気回復を願う「UP」からとったという。念願の理容院を開業させた吉田さんの強い意気込みが感じられる。西成界隈だけでなく、大阪さらには全国で「ウーピー」の名を轟かせることが吉田さんの夢だ。



社説
貯める者 使う者
記憶の流通

取材でいろんなお話を伺う中で「使う者、貯める者」という話があった。お客さんとしてお金を使うか、商売をして稼いだお金を貯めるかという二つの立場を対比していて、実際どちらが良い悪いではなくどちらも必要なものではあるのだが、貯めた者は今も生き残っているというお話だ。勿論貯めた者が今も貯め続けているかというとそうではなく、今は使っているといわしているのも確かで、そのようにして社会は成り立っている。人は暮らして行く中でいろんな体験をして思い出を貯め込んで行く。たくさんの経験をして思い出や体験を貯め込んでいても、お金と違ってなかなかそれを使う事ができないでいる場合も多く、せっかくの体験を埋もれたままにしてしまっている。取材をする我々は、そんな埋もれてしまいそうなお話を伺い、記事を書く事でその思い出や体験を蘇らせる事ができるという事になり、景気の悪い話といえばそれまでなのだが、そうやって貯めたお金を使う事が、現在貯めようとしている者を潤う事にもなるのだ。

未人廣告
新聞記者
西成なんでも
男女問はず・経験不問
山王一の五の三一 新福寿荘内
ブレーカープロジェクト
℡ ○七○-五○四六-八六六七

情の厚切りサンド

飛田本通商店街の喫茶神戸屋ウーピーの出すサンドイッチが好評だ。これまでは近くにあるパン屋への遠慮もあり隠しメニューだったが、その店が閉店したため本格デビューとなった。商売上の仁義を切って情厚く仕上げた逸品は、カツ、玉子、トマトの三種、何れも一五〇円。

少年の日常

母がお金でご飯を炊き、姉が家の前の七輪で魚を焼く。よくある夕食の風景だ。中に入っている炭や木炭の販売がめがねくん（10）の家業であり、今日も父は朝から忙しそうだ。めがねくんの朝は早い。食事をすませると、走って学校に向かった。戦争の後、金塚小学校はとても生徒数が多く、運動場にまでプレハブの教室が建てられていた。狭い運動場はいつも取り合い、学校に着くと、早速ドッチボールをして遊んだ。勉強や遊びの間には家業の手伝いもした。石炭の入った重いカマス袋をタイヤが太く大きな運搬車で食堂に届けに行く。いつも食堂は単身の男性で賑わっている。

軒先に来る夏

梅雨明けを前に早くも各地で地蔵盆の準備が始まった。新開筋商店街の傘提灯では、子どもの名前を提灯に入れる作業の真最中だ。毎年、近在の幼稚園や家庭などから六百に近い注文があるという。三代目のご主人（24）が岐阜県から仕入れた盆提灯に名前を一人ずつ楷書体で記していく。児全に乾くまで小半時、天井に吊るしておくが、それでは間に合わず、表の軒先まで利用して墨の香りのする新しい提灯がどんどん下がる。往来の買い物客もこの景色に夏の到来を感じ、子どもたちは吊られた盆提灯に自分の名前を探してはしゃいでいる。折りしも三年に一度の参議院改選と重なって候補者から選挙提灯の注文が引きも切らず、夜まで作業を続けるが暫くは休めそうにない。

人と
秋葉忠太郎さん

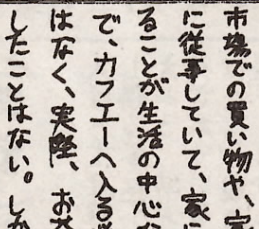
本紙で八文字格言を連載する秋葉さん。小学校三年のころ、凍てつく北海道の石狩川で、前かけ一枚姿で土を運び出す建設現場の労働者を目の当たりにし、社会の真実を知る。人生を左右する出来事となった。翌年より俳句を始め、早朝四時から八時にかけて、新聞の切り抜きとチラシ裏に詠む俳句は毎日欠かさない。ただし現在阪神三連敗中で「ハンシンフズイ」の百一歳。

第一回山王井戸端会議 開催！

山王一丁目の路地奥で第1回山王井戸端会議が近く開かれ、近隣の話し好きの男女数名が心ゆくまでおしゃべりを堪能する。これまでは、大浦さん宅前で立ち話をしていたが、有志の手により椅子やソファー等が設置され、長時間の議論も可能となったことから改めて第1回会議を招集した。特に決まった議題は設けず、出席者自身の健康問題や町内のうわさなどを自由気ままに話す。採決を取ることもなく、熱論を尽くすスタイル。気心さえ知れていれば、職業、出身地に関係なく傍聴や発言をすることもできるという。一方で、議場が住宅密集地にあるために会議中に通行人が横切るといったことも考えられる。とはいえ座って話ができるようになって今まで以上に談論風発といくはず、と関係者は大いに期待を寄せている。会議は雨の日と真冬を除いて不定期かつ頻繁に開催されることになる。

タコに吸い寄せられて♥

新開筋商店街にある衣料雑貨店が、先ごろ淡路島の五色町から可愛らしいお嫁さんを迎えた。このたびの慶事は瀬戸内海で獲れたタコが結んだ縁だという。戦中戦後は疎開や買い出しで大阪から淡路島へ渡る人も多く、新婦の父下野勝郎さんはそのような人たちを厚くもてなした。あるとき獲れたばかりのタコを差し入れたところ、これがたいそう美味しいと、以来毎年のようにやって来るようになった人があった。亜姫が大阪に嫁ぐことになって、その人の力添えもあり、紅白の幕を掛けた立派な嫁入り道具まで誂えたという次第。「派手なこともなくごく普通」と控えめに語る若い二人で、これから店を盛り立てていく。

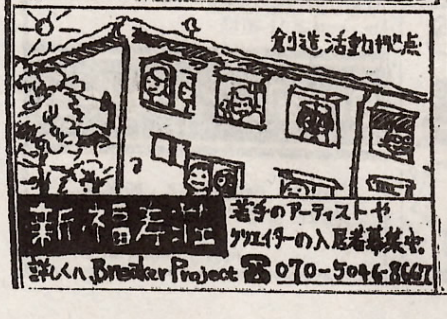


西成お地蔵様巡り（五）

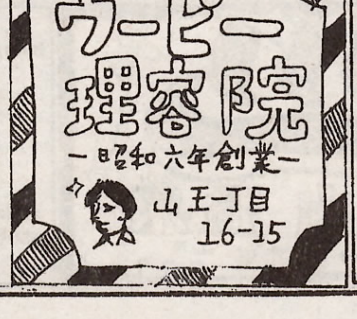
山王には「子安地蔵」は四体いらっしゃるが、ここのお地蔵さんは「子宝にめぐまれる」と定評がある。地蔵盆の日は、漫才、手品、紙切り等が行われ、鐘や太鼓、三味線の音が響き渡りとてもにぎやか。一軒ごとに四角い行灯につるした。本職（づぼらやのふぐ提灯の看板屋さん）が絵や俳句、川柳を書いて下さった。（柳本京子）

都会の灯

新開筋までの北門通りに灯る、赤い灯、青い灯。それはカフエーの街灯である。納所初美さん（31）は西成へ移り住んで来て、その灯に目を輝かせている。「田舎から出てきたから、西成はすごいなあ。きれいな灯や。」お祭りでなくても、毎晩人通りは多い。ましてや、天神祭りのときはもうすごい人だ。子どもに五百円を握らせ、遊びに向かわせると、お菓子や水風船ヨーヨーなどを買ってきた。通りには易事まで出て、お茶も振る舞われている。納所さんは、毎日、青空市場での買い物や、家事に従事していて、家に居ることが生活の中心なので、カフエーへ入る必要はなく、実際、お茶をしたことはない。しかし、あの赤い灯と青い灯は、自分が都会にいることを実感させてくれる灯りなのだと言う。



いつも手作り 区内町卸用達
特製サンドウィッチ タマゴ トマト 各150円
Everyday Handmade
パンと喫茶
神戸屋ウーピー
Since 1969
山王一丁目 16-15



辺口芳典「写にです」
ワークショップ&写真展
こども
ワークショップ
2013年7月6日(土)14日(日)
写真展
2013年7月21日(日)-8月12日(月)
山王1-5-31
新福寿荘内
アートスペース シェアー #13